

活動報告書

報告者氏名：八木佳子 所属：県立相模原養護学校小学部 記録日：2013年 2月 20日

【対象児の情報】

- ・ 学年
小学部 3年生の男児 1名 A児
- ・ 障害名
染色体第12番目部分欠損 知的障害
- ・ 障害と困難の内容
日常的な事はおおよそ理解しており、自分のやりたいことははっきりしているが、発語がない。意思や要求などは、指さしや身振り、サイン（数個）、直接行動で表出している。

【活動目的】

- ・ 当初のねらい
発語がなく発信手段としては直接行動、サイン（数個）、身振り、カードを使っているA児は、人とのかかわりを好む分、伝えたいことを表出できないことで、もどかしさを感じている様子が見られた。また、内面の意を、よりスムーズに多くを発信できると、楽しいコミュニケーション活動に発展していけるものと考えた。まずは、A児がiPadを使って「人に伝える」ことを知ることを目的とし、さらに発信内容が増えることをねらって取り組みをすすめた。
- ・ 実施期間
平成24年6月末から平成25年3月
- ・ 実施者
八木佳子、森田宏、鈴木祥子
- ・ 実施者と対象児の関係
クラス担任

【活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

給食場面において、あいさつやおかわり、やってほしいことなどの要求は身振りで表出していた。

・活動の具体的内容

iPadでも表出できることを知るために、伝えられていることから使用し始めた。

使用アプリ…「絵カードコミュニケーション」アプリに給食場面で使いそうな絵カードと学年の児童、担任の写真カードを入れた。

使用場面…給食場面のほぼ毎日。A児の机に置いて自ら扱えるようにした。

関わり方

- ・おかわりが欲しくてお皿を差し出したときに「おかわりください」のカードをタップするように促す。音声を聞いてから要求に応える。
- ・パンの袋を開けて欲しくて差し出したときに、「やってください」のカードをタップするように促す。音声を聞いてから要求に応える。
- ・あいさつ当番として、A児が「いただきます」をタップした後、みんなで挨拶をした。

など

少し慣れると、自分で操作して他のアプリを開き遊ぶようになった。食事中は他のアプリに変えない約束にしたが、守れずにもめることもあった。その後、アクセスガイドで操作を制限できることがわかり、食事中は物理的に変えられない状態にした。

・対象児の事後の変化

身振りや直接行動で表出していた「おかわりください」「やってください」「いただきます」「ごちそうさま」は、すぐに自らiPadで言えるようになった。苦手な食べ物があるときに、騒ぐこともあったが、「いりません」とタップして避けることも出来るようになってきた。おかわりをもらおうと「ありがとう」とタップすることも覚え、スムーズに使っている。

また、担任の写真をタップして、応えてもらおうと嬉しそうにしていたり、他の児童の写真をタップしてその児童を指さしたり、欠席児童の写真をタップして近くの大人が「お休みだね」と応えると満足そうにうなづいたりする様子があった。

※この事後の変化を受けて、カードと使用する場面をさらに増やした。

- ・A児が言いたいのではないかと考えられる言葉（授業で行ったこと、休み時間にやっていたこと、連絡帳からの情報など）を、さらに作成していった。新しいカードが増えるとすぐに気づき、タップしていた。
- ・給食場面以外で、iPadを使いたいと身振りで伝えてきた時にも、休み時間は、自由に使用出来る場面とした。好んで遊ぶアプリは、ねえ、きいて・うじゃぶー・電車が動く・My baby homework・カメラなど。カメラは対象に向けることが難しいがシャッター操作ができ、撮った画像を担任がカードとして取り入れている。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

A 児が iPad を楽しそうに操作する様子から、タップして出た言葉を聞いて、伝えたいことを言っていると確認できること、また、自分で言葉を発しているような感覚を味わっているのではないかと思われた。カードのみでは使うことは少なかったが、iPad 画面のカードはよく見て使用するようになり、「音が出る」機能が A 児にとって、とても有効であると感じた。

カードを増やしたことで、A 児の発信は確実に増えた。しかし、同じカードを何度もタップしたり、やたらいろいろな言葉をタップしたりと遊んでいるように見受けられることも多い。ただ、この「自由に操作して遊ぶ」ことも大切だと考える。遊んでいる中で、カードがどの位置にあるかを覚え、必要な時に使いやすくなる。また、知らない言葉を覚えるきっかけにもなる。言葉を道具として使うようになるときに、その道具でたっぷり遊ぶことも必要ではないかと思う。そして、本当は A 児のつぶやきだったりするかもしれない。

発信をどう受け止めて、どう返すか、かかわる大人が A 児の思いをくみとりながら応じることも、楽しい会話につながられる。人との心地よいかかわりを積み重ねられるようにしたい。前後の状況、まつわるエピソード、本人の興味関心など想像力を駆使して応じる、A 児に添ったかかわりができるよう、大人自身の感度も高めたい。

・エビデンス（具体的数値など）

絵カードコミュニケーション導入時と現在の絵カードの枚数をカテゴリーごとに表示した。使用頻度の差は大きいですが、ほとんどのカードを A 児自身がタップし、言葉を確認している。

《カード枚数》

カテゴリー	iPad 導入時	2 月現在	内容（例）
身近な人（写真）	1 5	2 2	学年児童、担任、他の教員、家族
給食時	8	1 0	おかわりください、いただきます など
あいさつ、気持ち	—	2 7	ありがとう、かわいい、いらいらする など
乗り物関係	—	1 0	電車、バス、エスカレーター など
場所（校内、校外）	—	1 9	体育館、中庭、スーパー、病院 など
教科名	—	1 1	体育、図工、音楽、生活 など
食べ物	—	2 3	カレーライス、コーンフレーク、ケーキなど
遊び など	—	1 6	トランポリン、そり、携帯 など
合計	2 3	1 3 8	

《ページ数》

iPad 導入時…8 枚×3 ページ

現在 …15 枚×14 ページ

導入時はカードの大きさが「小」だと見づらそうであり、押し間違えも多かったため「中」で作成した。スムーズに操作するようになり枚数も増やしたため、「小」に変更したが対応できた。ページ数が増えたが、どのカードがどのあたりのページにあるかを覚えてきて、目当てのカードがあるページをスムーズにめくっている。

・その他エピソード（画像などを含めて）

・ある日の給食時間に、児童 3 名の写真カードを繰り返しタップして、手を振っていた。いつもは気になる 1 名の児童の写真カードばかりタップしていたのに、様子が違う。考えてみると、その 3 名の児童はその日の朝、宿泊学習に出かけていて、給食時間にはいなかった。また、出発時には A 児も手を振って見送りしていた。「〇くん、△くん、◎くん、お泊りに行ったね。「行ってらっしゃい！」ってバイバイしたね。」と話すと、うんうんと笑顔でうなづいていた。

→A 児が何時間も前の出来事を覚えていたことがわかり、大人側の A 児に対する理解が深まった出来事でもあった。また、指さしや身振りでは伝えきれないこと、目の前にないことも、iPad があると表出できたことを実感した。

・A 児が体調の悪そうな様子があり、教室で横になっていた時、気分転換にでもなればと思い、傍らに iPad を置いておいた。遊ぶ様子はなかったが、しばらくして「ママ」「ママ」「ママ」「おうち」とタップしてきた。A 児は毎日、放課後のディサービスを利用しているが、「A くん、ママに迎えに来てもらっておうちに帰りたいんだね。」と話すと、うなづいて、また横になっていた。

→本当に伝えたいときに、自分で表出できたと思われた出来事だった。

・給食場面では、前半は食べることに集中しており給食のページを主に使っている。ある程度お腹の落ち着いてきた後半は、他のページの様々なカードをタップしており、担任がそれに意味づけして応じる中で、会話のようになり団らんの時間になっている。



「やってください」
牛乳パックのストロー
口を開けてほしい。



「〇〇先生」



「でんし

〇〇先生が出張でいなかった日、「〇〇先生」と何度もタップしたので、担任が「電車に乗って出張に行ったよ。」と伝えたところ。

- ・現在はまだ、気持ちが不安定になると、iPad を乱暴に扱う時もある。自分の気持ちを伝える手段としてさらに活用できていく中で、iPad が A くんにとってもっと大切なものになってほしい。そうなることで、担任の促しや制限のある必要な限られた場面でも、自分で持ち歩き、iPad を使用して様々な人とかかわれるようになることを目指して、今後も取り組んでいきたい。

※ iPad を使用して発信する取り組みを進めてきた同時期に、本児の発声する音が豊富になってきた。「あたあた…」のような喃語が主であったが、「ぺちやぴちや」「ばいあ…」などいろいろな音で長く連ねていること（ジャーゴンのように）が増えてきた。また、返事をするときに「はい」らしき発語があるのみだったが、「ママ」「バイバイ」も言えるようになってきた。

iPad 使用との関係性は図れないが、発信する楽しさ、人へ伝わる方法で発信しようとする気持ちの高まりを見守っていきたい。